

## IV 果 樹

果樹の生育は、前年よりもやや遅れているものの、高温により外観よりも果実の成熟が先行しやすいので、適期収穫に努める。

また、基肥の施用時期であり、樹勢に応じた施肥量で適期に施用する。さらに、台風の襲来に備え、事前の対策を手抜きなく行う。

### 1 適期収穫

(1) ももの「川中島白桃」や「ゆうぞら」の収穫適期は、満開後の日数や果実の着色程度、地色、手触りによる果実の弾力、糖度等を目安に決定する。満開後の日数による収穫日の目安は、「川中島白桃」が125～130日、「ゆうぞら」が135～140日後となっている。おおよその収穫予想日を推定し、予想日に近づいたら糖度や硬度による判断を行い収穫する。

収穫は、熟度の進みが早い、樹勢が弱い樹から始め、1樹内では樹冠上部の枝から下枝へ、樹冠の外部から内部へ、長・中果枝では先端から収穫し、何回かに分け適熟果を収穫する。鮮度保持のため、収穫は朝の涼しい時間に行う。

(2) りんごの「つがる」や「さんさ」などの早生品種の収穫は、日持ち性を重視し、硬度が13ポンドを下回る場合は、着色にとらわれず収穫適期内に収穫する。また、中生種の「千秋」等も収穫適期の把握に努め、収穫遅れにならないように注意する。

(3) ぶどうの大粒種は、品種特有の着色となり、糖度が高く酸度がほどよく低下したことから収穫する。収穫に当たっては、果粉を落とさないように丁寧に行う。

(4) 西洋なしの「パートレット」の収穫は満開後120～125日頃、「オーロラ」は満開後125日前後が目安となる。また、「マルゲリット・マリーラ」の収穫は、満開130日前後、「ゼネラル・レクラーク」は、満開後150～155日が収穫の目安となる。今後、園芸試験場から出される情報に留意し、予想日に近づいたら糖度や硬度、ヨード反応等の指標に従って判断を行い収穫する。また、収穫は樹冠外周の日当たり良好な部位から行き、樹冠内部は2～3日後に収穫する。

出荷の際には、選果・選別を丁寧に行い、輪紋病等病害果は取り除く。

### 2 りんごの着色管理と中生品種の落果防止対策

(1) 支柱の立てかえ、枝つり、徒長枝の整理などを行い、樹冠内部の受光体制を改善する。葉摘みは、程度が強すぎると日焼け果の多発につながったり、早期に摘みすぎると着色が進まない場合があるので、適期に作業を行う。始めは果実に接触している葉を摘み、その後、果そう葉を摘むようにする。

(2) 摘葉剤を使用する場合は、使用時期や散布時の気温によりその効果は変動する。処理後、平均気温20℃程度で経過した場合は安定した効果が見られるが、15℃程度では効果は低い。また、樹勢が弱い場合は効果が強く出る傾向にあり、ボルドー液を散布した園地でも過剰摘葉となった事例があるので、使用にあたっては注意する。摘葉剤は使用できる品種が限定されているので、使用基準に従い散布する。

(3) 「デリシャス系」、「紅玉」など中生品種では、落果防止剤を収穫開始予定日の25日前に1回散布する。

### 3 台風対策

#### 【事前対策】

- (1) 大雨に備えるため、園内の明きよの点検、周囲の排水路や側溝等の整備を行い、雨水が園内に停滞しないようにする。防風ネットは事前に点検し、損傷がひどいネットや古くなったネットは、耐久性の強いものに替え、支柱も補強する。
- (2) りんごわい化栽培やおとうなどの根域が浅い樹は、支柱で幹や主枝を支えて倒伏を防止する。また、幼木も、倒伏防止のため支柱を立て縄等で結束する。
- (3) 収穫期を迎えている品種については、収穫を急ぐ。まだ、収穫ができない樹は支柱を補充し、落果を防止する。
- (4) 棚栽培では、棚の倒壊を防止するため、古い支柱の交換や棚線の点検を行う。
- (5) 収穫が終了したぶどうの雨よけテント等の施設では、ビニールを撤去する。未収穫の施設では、マイカー線の締め直しや支柱の点検を行い、ビニールの破損部分は補修しておく。

#### 【事後対策】

- (1) 風で落下した果実は、傷の程度でよりわけ、それぞれの用途に応じて適正に処分する。損傷の見られる果実は、生食用には出荷しない。
- (2) 倒木した場合は、できるだけ早く起こして支柱で支える。すぐ起こすことが困難な場合は、根に土をかけるなどして乾燥を防止する。半分以上の根が切断した場合は、翌年以降樹勢が衰弱するため、その程度に応じて着果程度を加減する。
- (3) 枝が裂けた場合は、裂開部を接合するため癒合剤を塗布し、ボルトやカスガイ等で固定する。損傷がひどい枝は切り落とし、傷口に癒合剤を塗布する。
- (4) ほ場の排水が悪い場合は、根の活動が低下するため、すみやかに排水対策を講じる。また、浸水や滞水している場合は、排水溝を掘る等、早急に排水対策を行う。葉や果実が水につかった場合は、早急に殺菌剤を散布し、果実腐敗や病害の感染を予防する。
- (5) 風により葉や果実にキズが発生している場合が多いことから、殺菌剤の散布により病害を防止する。

## 4 病害虫防除

りんごで斑点落葉病、輪紋病、炭そ病、すす点病、すす斑病などの発生が多い園地では、9月上旬から中旬に有機殺菌剤や有機銅剤を1～2回散布する。

中山間部の西洋なし、かきを中心としてカメムシによる加害が懸念されるほ場では、殺虫剤による防除を行う。

ぶどうの雨よけ栽培では、収穫が終わったら直ちにビニールをはずし、べと病、褐斑病、フタテンヒメヨコバイなどの防除を行い、葉を病害虫から守る。

ももでせん孔細菌病が多い園地では、収穫後に9月上旬から下旬にボルドーを2回散布する。なお、薬剤散布にあたっては、農薬の使用基準を遵守する。

## 5 適正施肥

りんごや西洋なしの基肥の施用は、9月下旬から10月上旬に行い、翌春の生育に備える。有機質肥料については分解期間を考慮し、2週間程度施用時期を早める。

施肥量は、樹齢や新梢長、新梢の停止時期、葉の大きさ、葉色などによる樹相診断と今年の着果状況等も加味して決定する。

※残留農薬のポジティブリスト制度が平成18年にスタートし、今年で5年目を迎えます。農薬を使用する際は、使用基準を守り、農薬の飛散を防止するなど細心の注意を払いましょう。